

Title	信多純一先生の人と学問
Author(s)	福田, 安典
Citation	語文. 2019, 112, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77200
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

信多純一先生の人と学問

福田 安典

感傷は他に譲り、学術誌という本誌の性格に鑑み、学問を語ることで先生のご冥福を祈りたい。

先生の学問は、日本近世文学会を主戦場として、院生の頃から参加され自宅を会場に提供されるほど情熱を傾注されていた演劇研究会を中心に、伊藤正義・片桐洋一両先生との厚誼、近松研究所、古典芸能研究センター、晩年の絵画関係の私的研究会、稀書搜索などで熟成されたものである。私はその孰れとも無縁の不肖の弟子であるので、各領域からの視点とは別に、先生の学問と人となりを、大きく阪大ご着任前・在阪大時代・以後の三期に分かって語ってみたい。

本誌第六十二・六十三輯の御退休記念輯に先生の論著目録が載る。この目録に『赤木文庫古浄瑠璃稀本集―影印と解題―』を加えたい。赤木文庫は横山重先生旧蔵書の研究者垂涎の文庫である。横山重先生は、若き信多先生に目をかけられ、信多先生も横山先

生の話は何度も繰り返され、しかもその口調の熱さは終生変わられることがなかった。横山先生ご逝去ののち、先生の御尽力により古浄瑠璃正本九十六点と先生の御所蔵本四点を加えて阪大に入られた。本書は先生の学問を象徴するものとして、先生の退官に合わせて企画されたものであり、同書の時松孝文解題には「信多先生」の文字が踊っている。この書を加えて先生の大阪大学時代までの学問を知ることができる。

先生が大阪大学に來られたのは昭和四十三年十月、三十六歳の若き助教教授であった。着任前に宇治加賀掾研究で衝撃的に斯界に認められ、『近世文芸』創刊号、古典文庫に掲載されている。先生が太夫を問題とされたのは卒論時に受けた諸先生方のアドバイスであったとか。卒論で扱われた対象がそのまま高い評価を得ていたことは当時の阪大生の語り草であった。この時期に注目されるのは西鶴の『暦』『凱陣八島』と近松の『新暦』『出世景清』の上演年代について書かれた『西鶴研究』掲載の御論考である。この

近松と西鶴、加賀掾と竹本義太夫の競演はよほど先生の心を惹いたのか、ことあるごとに話されていた。

阪大に着任されてからのお仕事は、古浄瑠璃正本集、評判記集成、そして近松全集と近松についての研究書に指を折るべきだが、のろまそろま狂言、浄瑠璃御前物語、狂歌、人形浄瑠璃舞台史なども捨てがたい。また『阿弥陀胸割』復元考、謎絵研究をはじめとする西鶴研究、絵画関係、契沖、八犬伝などの演劇以外の一連の論考は、その発表段階から話題となったものが多い。

私の受けた講義は、先生のこの問題意識に沿い、かつ新潮古典集成や『近松の世界』、新大系の古浄瑠璃集の上梓の機運に伴うものであったが、先生の阪大退任後のお仕事の前夜とも呼ぶべきものが多かった。浄瑠璃御前物語―この作品についての先生の思い入れは格別であって、折しも岩波の新大系に採択されたこともあって、大学院の演習の大半はほぼそれに費やされたといつてよい。先生は山崎写本によって推定される「すべての（先生好みの）要素を具有する原本」を想定され、現存諸本はその一部を残した略本であるとする立場であった。その先生の想定される原型が院生ごときでは見えないので、担当院生は大いに悩んだ。先生が古浄瑠璃の専門であること、反面、受講院生の大半が演劇専門ではないという構図で厳しく指導されたことは、個人的には印象的であった。狭い「専門」に自ら閉じこもるのではなく、広い関心を持って教え子が学問に立ち向かう素地を、その演習でお示しにいられていたと思う。

講義の方は、私の頃は融通無碍、西鶴や鈴木春信を扱い、楽しげで受講生も多かった。まさに阪大の名物教授の観を呈していた。好色一代男、八犬伝、浄瑠璃御前物語についての言及が増えられた。その頃の阪大生にとっては演劇研究者とは別の印象の方を強く抱いているかもしれない。

いま、手元に先日神戸女子大学で開催された偲ぶ会のパンフレットがある。そこに生涯を通じた論著書目録が載る。その掲載項目から、阪大退官時のものを引いたものが先生の晩年の学問ということになる。近松自筆零葉を筆頭に掲げる『歌舞伎浄瑠璃稀本集成』（演劇研究会編）は先生の鋪かれた道の「集成」とも呼ぶべきものであり、例えば秋本鈴史解題は、古浄瑠璃と当代浄瑠璃、時代物と世話物との劃然を問うもので、時松孝文の名が見えない憾みはあるが、先生の学問が次世代の門弟や研究者に受け継がれる予感が漂っていた。先生の引かれた線に若き情熱が蝟集すれば、そこに新たな地平が展かれるような期待が、あの頃は確かにあった。一方、先生の動向に目をやれば、近松門左衛門や演劇よりも、岩波書店から出された西鶴、馬琴、浄瑠璃御前物語の「三部作」、そして大津絵などの仏教版画関係のものが目立つ。

以上、演劇研究会や横山重先生らに導かれた古浄瑠璃研究、阪大時代における近松研究、先生の学問が次世代へ継承され、それまでに胚胎していた新方向の研究が昇華していく神戸女子大学時代から晩年までの大まかな俯瞰図が得られる。もとより菲才の私ごときがこのような俯瞰を示したところで何ら賛同を得られるわ

けではないが、この俯瞰から見える現況の日本文学研究について先生のお考えを思量しながら言及することで、これまた（先生からのお叱りは覚悟のうえで）先生への拈香代りとしたい。

初期の古浄瑠璃研究と後期の八犬伝研究や一代男研究との間には「懸隔」があると見られる向きがあるかもしれない。しかし、もしそれを「懸隔」と見てしまうとしたり、それは、逆に自身の研究の陥穽を露呈していることになる。それはどういうことか。（近松も含めて）古浄瑠璃は、謡曲、伝承、軍記、語り、和歌故実、古典など前代までの使える要素はすべて取り込み、出版や上演という洗練した新形式として編纂されることで成立した、それが先生の把握であった。貪婪な胃袋を持つ古浄瑠璃（西鶴、近松、馬琴も同じ胃袋を持つとされた）の全容は先生の知囊にあった。そのためかわれわれは、一作品について前代までのあらゆる似通うものを搜索し、それを取捨する作業を徹底的に教え込まれた。これは単なる典拠探しではない。「文学」とは何かを見つめる重要な過程であった。先生の言う「文学」は「本地物」、「愛」、「義理」、「遊び」という種々の言辞によって重層化され、対象によってその切り出し方や見え方が異なるために把握しがたいものかもしれない。

いま「本地物」を例にとる。「本地物」は先生にとって「文学」の重要な枠組みの一つであり、その「文学」型は古浄瑠璃や説経に顕著に見られるが、ものぐさ太郎、浄瑠璃御前物語などにも求められるべきものであった。それが故に、先生の先述の浄瑠璃御前物語のテキスト確定の規矩は「本地物」である。その枠組みを

「文学」の基礎に置いた場合、実は八犬伝も一代男も「本地物」の型にあてはまるといっているのである。異論のあることは覚悟の上ながら、生誕、苦勞、奇瑞、神仙への昇華というプロットを「本地物」と呼ぶことを認めてしまえば、八犬伝と一代男もそれにカテゴライズされてしまうのではないか、ということである。それが先生の大切な「文学」認識であった。その先生の認識を通して見た場合、古浄瑠璃と八犬伝の間には「懸隔」などはなく、むしろ通底する文学性が見えるだけである。あとはその作品が成り立つために前時代の素材が確定され、それを作家なる名料理人が書承・伝承の両面から取捨、捌いてみせたのが名作ということになる。その発想が演劇における「世界定め」と酷似すること、これまた偶然ではない。一代男や八犬伝を作者による語りと見た場合、作者はまず「世界」という縦糸を定め、それに付与する魅力ある横糸を探していく。時にはそのきらびやかな横糸の方が注目されるかもしれないが、文学の本質は縦糸である。その縦糸の一つが「本地物」とあるというのである。

先生のこの発想を理解するためには、いまわれわれが持つ「専門」という意味のない権威化を捨て去る必要があるだろう。小説、俳諧、演劇、和歌などそれぞれが専門を主張し、他ジャンルからの参入を排除する傾向が現在の研究の向かう方向であれば、先生のお仕事は理解されることは難しいであろう。事実、論争により研究の深化を見た先生は論争好きで書評好きであったが、八犬伝や一代男については論争が巻き起こらなかったことをお嘆きであつ

た。先生の口調をまねれば、研究者よ、研究は楽しいのだ、蛸壺のような世界から飛び出し、自由に文学を語ろう—というのが最終的にたどり着かれた境地ではないかと愚察している。

先生の危惧の通り、いま日本文学研究の魅力は急速に損なわれている。これは日本文学に魅力がなくなったからでも、若年層の意識の劣化が原因でもない。「文学」を研究し、その魅力を伝えるべきわれわれの責任であろう。時松孝文という次世代の旗頭を喪つてわれわれは先生からのバトンを受け損なうのではないかという自戒を述べて、語りたことこの半分にも満たないが、その語れない部分を今後も大事にすることで追悼の終わりとしたい。合掌。

(ふくだ・やすのり 日本女子大学教授)